
魔王と一緒に魔王討伐

祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と一緒に魔王討伐

【Nコード】

N1366U

【作者名】

祐

【あらすじ】

昔、まだヒトが魔法を使えた時代。突然世界に現れた、ロキという名の魔王様。「初めまして、ヒト様方。私はロキと申します。それじゃあ自己紹介も終わったしこの世界貰うぞ。文句あるならかかって来い、全力で相手してやる」ヒトは魔法でロキに敵わず、滅亡を覚悟したのだが。「つまらん。これ使って少しは抵抗してみろ」ロキがヒトに渡したのは神具。直後にロキは追い詰められ、「流石にやりすぎたか、まあなかなか楽しめたぞ」と言い残し、彼は倒れた。だがロキの呪いを受けたヒトがいた。ロキが復活する、とヒト

は彼を恐れた。そして苦しめられた恨みを込めて、彼は永遠の苦痛とともに封印された。

設定とか解説：1

魔法の種類

神聖魔法

人間の使う術。

大まかに回復術、攻撃術、防御術、汎用術の四つに分類される。

回復術：強制的に対象者の再生力を増強し傷を癒す。

強制的であるため、対象者は大きく体力を消耗する。
属性は無。

攻撃術：火、水、地、風、光、闇の六属性に分類される。

・前者四属性は一般的で、扱えるものも多いが威力は低い。
・後者二属性は扱えるものが非常に限定的だが、威力は

凄まじい。

防御術：身体強化系、遮断系の二つに分類される。

・身体強化系は対象者の能力を強制的に向上させる。
使用後に大きく体力を消耗する。
属性は無。

・遮断系は結界や異空間を生み出すことが出来る。
扱いが難しく、特に異空間を扱えるものは、光、闇属性を扱えるものより少ない。

遮断系は攻撃術の六属性。異空間は無属性。

汎用術：移動系、攪乱系

・移動系は転移術、加速術がある。

相当)。

転移術の属性は無、加速術の属性は風(身体強化系に

・攪乱系は対象から意識をずらす、姿を消す、などの視覚情報を操作するものが多い。

属性は無と光。

魔術

魔族の使う術。

細かな分類はされていない。

時間的概念他

太陽、一の月、二の月がある。

太陽と二の月の動きはほぼこちらと同じ。

太陽が昼、二の月が夜を照らす。

一の月が時間、二の月が季節を示す。

一の月は一日に二度昇る。

一度目の昇り始めが三時、頂点で六時、沈むときが九時

二度目の昇り始めが十五時、頂点で十八時、沈むときが二十

一時

二の月は火の月、水の月、地の月、風の月がある。

三ヶ月を境に別の月入れ替わる。

対応の月が頂点のとき、もつとも季節の特徴が現れる。

水の月が冬にあたる。

地の月が春にあたる。

火の月が夏にあたる。

風の月が秋にあたる。

設定とか解説：1（後書き）

また追記するかもです。

第一話

動けない。

痛い。

動けない。

痛い。

ああ。

痛い。

動けない。

痛い。

死にたい。

目が。

開いた。

ああ。

死ねた。

やっと。

「お、おい。大丈夫か？」

う。

何、か。

「言葉分かるか？」

誰と。

「喋れんか。ちょっと待ってる」

口が、開く。

ああ。

動く。

首も、少し。

「起きれるか？」

誰か。

「無理か。おい、ちょっと来てくれ」

いる。

あつたかい。

体がきしむ。

何かに、もたれてる。

「ん、どしたー？」

抱きかかえられてる。

「いや、一人で座れないんだ。支えてるから水を飲ましてやってくれ」

「あいよー」

あつたかい。

「ほい、口開けてー」

水？

「ってか言葉通じてんの？ま、いいや。いくよー」

何かが、口に触れる。

「ぐっ」

苦しい。

「うお、吐いたぞこいつ」
「むせたか？」

咳が止まらない。

「大丈夫かー？」

背中をさすられる。

「水飲めんのは流石にやばくね？」

咳が止まる。

口を開ける。

「ん、いけるか？」

再び、口に何かが触れる。

大丈夫、つばは飲める。

うん、飲める。

「水飲むのも一苦労ってか。こりゃマジっばいなー」

「信じられんのも無理はないが・・・」

冷水が気持ちいい。

ああ、涙が。

「ん、泣いてんぞ！」

「大丈夫か？」

「どしたー？」

安心する。

生きてる。

それだけが、ただ嬉しくて。

「なんか、すっごい面倒臭いことに巻き込まれる気がするんですけど」

「は？」

水を飲み終えても、しばらく泣いていた。

第一話（後書き）

頭が回ってない感じをどう出せば良いのか分からなくて悩みました。

第二話

さかのぼること数日。

「働かざるもの、食うべからず。いや、飲むべからず、か」

村で酒乱と呼ばれる彼女に、宣告した。

これを腐れ縁といわずして、なんというのだろう。

僕が、まだ遊ぶことにかまけていたころ、彼女に出会った。

女子ならそろそろ身なりに気を使う年頃、のはずが、髪を見ても服を見ても男子そのものの。

ガキ大将と呼ばれ、みなを率いて森を駆け回る。

大人があきれるほど活発で、自信家で、すごく輝いていた。

・・・何を言っているんだろう。

出会ったときの彼女の背に、僕が追いつこうとしたとき、父に連れられて村を出た。

次のラザフ村に彼女が来たのは、父が村になじみ始めたころだった。再開のとき、彼女は僕を食い殺さん勢いでこう言い放った。

「お前は私のライバルだ、次は負けない」

まったく状況が読めず、そばにいた彼女の両親に助けを求めるように視線を飛ばす。

こちらの視線に気づかず、彼らは大笑いしていた。

後に聞いた話によると、彼女の夢は世界を回り、冒険者として名を上げること、だったそうだ。

だが、年少の僕が先に村を出たことで、彼女の闘争心に火をつけてしまった、ということだ。

はなはだ迷惑なことである。

が、当時の僕は単純に、友達に再会できて喜んでいた。

さて僕は、あまり新しい輪に加わることが得意ではない。

それは幼少のころも変わらず、彼女が来るまで村に遊び相手がいなかった。

その状況を一変させたのは、やはりこの迷惑女である。

初日にガキ大将をのして、村の子供達を遊び場に集めると、僕の手を引き彼女は高らかにこう宣言した。

「私と戦いたければ、まずライバルのアキハを倒せ！」

自分の耳を疑い、すぐさま彼女を見る。

なんともいえない笑顔がそこにはあった、よく覚えている。というか、忘れられるもんか。

その日以降、僕はかつてのガキ大将その他にぼこぼこにされた。

彼女に挑戦したい、なんて考えは彼らにはなかっただろう。

まったく、とんでもないとばかりを受けたものである。

そのおかげで喧嘩には強くなったんだけれど・・・、釈然としないのは当然だろう。

「ライバルがそんなに弱いと、私も弱く見られる！もっと強くなれ！」

と、負けるたびに、彼女にさらにぼこぼこにされる日々は、涙なしには語れない。

ああ、本当に辛かった……。

いつしか子供たちの間で、頂点で二つの月が重なる日は決闘の日、という決まりができた。

ラザフ村を出るとき、僕の背は彼女に並んでいた。

だが、一度として彼女を超えることはできなかった。

「また先に行くのか！……次に会うときまでに私を超えているよ」

僕には、彼女以外にも友達ができていた。

その子達は、みな一様に悲しそうだった。

僕は涙ぐむほど悲しんでいたのだが、彼女のその一言ですべてが吹き消されてしまった。

ああ、また追いかけてくるのだろう。

そう思うと、悲しみが楽しみに上塗りされた。

そのころから、僕自身も彼女をライバルとして見ていたのかもしれない。

そしてローウェン村に着いて数日後、当然のように彼女もやってきた。

一人で。

彼女の両親は冒険家だった。

幼少より冒険譚を聞かされたためか、彼女は親に同じく夢を冒険に

向けた。

そして僕の後を追ってきたのだが、道中に問題は存在した。

魔王が封印されて大分時が経ったとはいえ、魔族が支配する地は多い。

道中にある、彼らが超えようとした山もその一つである。危険だからと、父が迂回した山を彼らは通ってしまった。

「強行軍には危険が伴う」

父が彼女を見据え、とても悲しそうな顔で言った。

僕には母親がない。

そして一度として、父から母のことを聞くことはなかったが、このときに悟った。

父は彼らと同じ過ちを犯したんだ、と。

そのときは、父も僕も仔細を聞かなかった。

何も持たず、泥だらけの彼女を、僕らは新居に迎え入れることにした。

そして、家の椅子に三人で腰掛けたとき、彼女が泣いた。後にも先にも、彼女が泣いたのはあの時だけだろう。

翌日、僕の居ぬ間に仔細を聞いたらしい父は、傭兵を雇い山に出かけていった。

僕は、前日から続く自責の念に押しつぶされていた。勝手な思い込みといえ、まあそうだが、このときは自分を責めざるを得なかった。

「ごめん」

腫れぼったい目をした彼女にそう告げた僕は、次の瞬間殴り飛ばされていった。

「なんで」

「なんでアキハが謝るの？アキハは何もしてない！なのに謝らないで！悪いのは私、全部私！私が急ごうなんて言わなければ！大丈夫なんて言わなければ！お父さんもお母さんも死ななかった！悪いのは私！でも私だけ生きてる！なんで・・・なんで・・・」

悔しそうにうつむく彼女を、呆然と見つめていた。
僕は、何も言えなかった。

彼女は家を飛び出していった。
その日、家には誰も帰ってこなかった。

夜、僕はベッドの中で泣いていた。
父が殺される。

彼女が魔物に食い散らかされる。
山に横たわるみんなの死体。

そんな光景が何度も頭をよぎり、絶望し、でも何もできずに泣いていた。

日が昇っていることにも気づかず、ノック音で目が覚めた。
おそらくひどい顔だっただろうが、そんなことは気にしない。
嬉々として僕は家の扉を開けた。
そこには、駐屯兵と思われる人と彼女がいた。

「ミズキ！」

駐屯兵に構わず、僕は彼女に抱きついた。
名前を繰り返しながら、しばらく嗚咽が出て止まらなかった。

駐屯兵によると、一人村を飛び出す彼女の尋常ではない雰囲気疑問に思い、何とか留めたが、帰る家がないとのことで、駐屯所で一泊したのだそうだ。

しかし今朝になって、この家のことを言い出しつれてきた、ということだった。

彼女のほうを見ると、いささか恥ずかしそうに目を伏せた。

何か思うところがあつたのだろうか、帰ってきてくれてうれしいことに変わらない。

「ありがとう」

と、目も見ず言う彼女の代わりに、駐屯兵に丁寧に礼を言って別れた。

その後、他愛もない話をしたか、はたまた喧嘩をした気がする。

五日目までは平和だった。

大人がいなかったため、多少不安はあつたが、お金は十分にあつたのでたいした問題はなかった。

父の料理の腕がひどかったこともあり、僕は人並みに料理が出来るようになっていた。

彼女はなぜか悔しそうだった。

山までは、急ごうとも二日はかかる。

そのことは彼女が身を以って知っていたし、僕も聞いていた。
だが、五日経つても帰ってこないのはおかしい。

人を運ぶ手間や苦勞を、このときは考えられなかった。
だからこそ、僕らは不安になった。

それまでは、カザフ村に同じくガキ大将をのし、僕を介したチャンピオン争奪戦を繰り広げた。

不安がなかったわけではないが、僕は用心深い父を信じていたし、彼女もそんな僕を見て安心していた。

迷ったのかもしれない、怪我をしているだけかもしれない、とどこかで納得する理由を探したが功を奏さなかった。

彼女の帰還に手放しに喜んだ罰なのかもしれない、と一人枕を濡らしながら眠った。

七日目

再びソックで目が覚めた。

目が腫れていたようだ、訪問してきた駐屯兵の応対をしていた彼女に心配されてしまった。

顔を洗い終えダイニングに戻ると、中央の机に二人が腰掛けて僕を待っていた。

駐屯兵の話を知りたいような、聞きたくないような、なんともいえない状況。

僕は椅子に手をかけ、固まっていた。

「ふむ、結論から先に言ってしまう。お父上は生きている。無事とは言えんが、生きて村に戻ってきている」

生きている、それが耳に届いたとき僕は泣いた。
また泣いた。

男は人前であまり泣くものではないぞ、と父に諭されたことがあるが、そのときはそんなことを思い出す余裕なんてなかった。

僕が泣いている間に、彼女が仔細をすっかり聞いていてくれた。

僕はぼろぼろの顔をしながらも、駐屯兵の話を聞いていた、つもりだった。

だが翌日、ベッドで目を覚ました。

移動した記憶はなく、相変わらず目が腫れているようだった。

あれは夢だったのか、と不安になり彼女に聞くと、笑顔で彼女はこういった。

「うん、夢だったよ。アキハのお父さんは怪我してて、今病院にいて、私のお父さんとお母さんは見つからなくて、荷物だけ持って帰ってきたことは全部夢。昨日は何もなかったよ」

一瞬固まったが、後半の内容を僕は知らない。

これを神妙な面持ちで告げられたならば、気が気でなかっただろう。

「ありがとう！」

なぜそう言ったのか、僕自身でも分からないが、とにかくそう言いたかった。

家を飛び出し、病院に向かう・・・が場所が分からない。

いかんせん村に来て日が浅く、まだ世話になったこともないのである。

家のすぐ前で立ち止まっていた僕の手を引き、彼女は冷やかすようにこう言い、手を引いた。

「仕方がない、お姉さんが連れて行ってあげよう」

多少腹が立ったがどうしようもない。

が、無性に恥ずかしくなったので、ふてくされるように、僕は少し抵抗しながら彼女に引っ張られていった。

病院の大部屋で父は横たわっていた。

重傷ではなかったようで、傷が見当たらなかった。

命にかかわるほどの深手でない限り、辺境の村の病院でも一日かか
らず完治してしまう。

このときほど神聖魔法のありがたみを感じた日はない。

神聖魔法における回復術は、再生力を増強し強制的に傷をふさぐた
め、一気に体力を消耗する。

よって回復術を受けると、最悪の場合意識を失ってしまう。

魔族が扱う魔術には、傷そのものをなくするような術もあるらしいが、
いまだに人が使えたという事例は耳にしない。

父が意識を失っているのは、神聖魔法を受けたからなのだろうと解
釈し、僕は胸をなでおろした。

「今日中に目を覚ますはずだ。ここで待っているか？家に戻るなら
ば、目が覚めたときに伝えにいくが『待ちます』そうか」

いつの間にそばにいたのだろう、昨日の駐屯兵だった。

はなから目を覚ますまでここにいつもりだったので、断言した。

彼女の同意を得るべきかと思い、視線を移すと、私も一緒にいる、
と言わんばかりに頷いてくれた。

駐屯兵は軽く挨拶をして部屋を出て行った。

他に、父と一緒にいったであろう傭兵が横たわっていたが、同様に
意識がなかった。

なかなか危険だっただろうことが伺える。

無事に目の前に横たわり、眠る父を見てまた泣きそうになったが、
今度は我慢した。

父が目覚めたのは一つ目の月が頭上に上るころだった。
椅子に座り、窓から空をボーッと眺めていたので、父が声を出すまで気が付かなかった。

「アキハ」

突然水をかけられたように、一瞬飛び上がりそうになった。
父の顔には、疲労が見て取れたが、満面に笑みを浮かべていた。
また、泣いてしまった。
それも抱きついて・・・。

そして、案の定僕は眠ってしまったようだ。
父ではない誰かに背負われているようだった。
身じろぎすると、その人はこちらに声をかけてきた。

「目が覚めたか、君はよく泣く子だな。昨日もこうやって泣き疲れて寝たところをベッドに運んでやったんだが、覚えているか？」

ああ、あの駐屯兵か・・・。
連日で恥ずかしいところを見られてしまった、と少し悶々としているとまた声をかけられた。

「感情豊かなのは良いことだ、恥じることはない。だが、あまり手がかかるのはいただけないな。後、女の子の手を煩わせるのも、な」

そういつて移された彼の目線の先には、ミズキが歩いていた。
彼女は馬鹿にするとまではいえないが、こちらを見てひそかに笑みを浮かべていた。

だが、その目はどこかうつろで、さびしげに見えた。

第二話（後書き）

お久しぶりです・・・。

またちよくちよく更新していきます。

疑問点とかいろいろあると思います。

今後解説入れていきますのでご了承を・・・。

入れ忘れたら・・・ごめんなさい、つつこんでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1366u/>

魔王と一緒に魔王討伐

2011年11月17日21時42分発行